

福祉系学生における子ども・子育てに対するイメージ —健康生きがいのあるまちづくりフェスタ(子ども・子育てフェア) に参加した学生のアンケート分析を通して—

大西 良・小栗正裕・保坂恵美子

The Research on the Sense to Children and Child-Nurturing of the Welfare Students — The Questionnaire Analysis of the Student who had Participated in “YUNIBAHIROBA” —

Ryo OHNISHI, Masahiro OGURI and Emiko HOSAKA

【要約】本研究は、福祉専門職となるべく学修を行う社会福祉学科の学生の子ども・子育てに対するイメージを把握し、健康生きがいのあるまちづくりフェスタ(子ども・子育てフェア)への参加意識、あるいは学生自身が持つ子ども・子育てに関わる経験との関連を探ることをもって、良好な子ども・子育てイメージの形成と、その支援のあり方について考察することが目的であった。

調査結果を以下に示す。①健康生きがいのあるまちづくりフェスタ(子ども・子育てフェア)への参加によって子育てへの関心の高まりや、今後の参加意欲の高まりは、子ども・子育てに対するポジティブな感情を高め、反対にネガティブな感情を抑えることが明らかとなった。②子育てに対する「地域の協力」の意識と、子ども・子育てによる成長についての捉え方、子どもに対するネガティブな感情についても関連があることが明らかとなった。③乳幼児との接触経験がある学生は、乳幼児に対して否定的内容の認識を抱いており、また、接触経験が乏しい学生で、乳幼児に対して肯定的内容の認識を抱いていることが明らかとなった。

以上のことから、今回の「生きがいのあるまちづくりフェスタ(ゆにばひろば)」への参加によって、乳幼児に対してこれまで抱いていた感覚的なイメージが具体的なイメージへと変化していることも推測され、学生がこれから親になる準備(レディネス)をしていく上での学習経験になることを示唆した。

【キーワード】福祉系学生、子ども・子育てイメージ、産学官民協働

1. はじめに

少子化が社会的問題として取り上げられるようになって既に久しい。少子化については1989(平成元)年の合計特殊出生率の、いわゆる「1.57ショック」が知られるが、これも既に20年前の出来事である。1994年の「エンゼルプラン」以降、少子化対策が徐々に進められながらも合計特殊出生率はさらに低下を続け、2005(平成17)年の合計特殊出生率は史上最低の1.25となっている。

少子化の大きな原因は「未婚率の上昇」と「既婚

者の出生率の低下」であるとされるが、金子(2003)は「少子化の最大の原因は未婚率の上昇」であると述べている¹⁾。未婚率上昇の要因として、結婚・出産に対する社会規範の変化、世間の圧力が弱まったことや、「独身貴族」の言葉に代表される、独身時代の快適な生活に対する若い世代の欲求があることなどはよく知られているところである。その中で、平成10年度版『厚生白書』に少子化の背景として「結婚や子育てに『夢』を持ってない社会になっているのではないだろうか」と述べられていることは興味深い²⁾。

言うまでもなく、結婚や子育てに「夢」が持てるためには、青年期までに形成される子ども・子育てに対するイメージが良好であることが重要である。同白書においては、結婚や子育てに「夢」が持てない背景について、家事・子育てと仕事の両立が極めて負担が重く、専業主婦も決して優雅とは言えなかった先行世代の姿を見た結果であると分析している。言い換えれば、家庭や子ども・子育てに対して良好でないイメージが形成された結果ということになるだろうか。

その後、保育・子育てを中心とした少子化対策・子育て支援のあり方は変化を見せ、男性を含めた働き方の見直しなど、企業を含めた社会全体による少子化対策・子育て支援へ向かっている。しかし、これは金子(2003)が言うように「既婚者の出生率の低下」に焦点を置くものである⁹⁾。だとするならば、既に若い世代に形成された子ども・子育てに対するイメージを良好なものにしていくことは、次世代に向けて教育が担うべき課題としてあり続けることになる。

また一方で、社会福祉士あるいは保育士といった福祉専門職になるにあたって、子ども・子育てに対してどのような意識を持っているかということは、特に子どもの福祉・保育の学習に対するレディネスであるとも考えられる。願わくは、福祉専門職の養成の中で、良好な子ども・子育てイメージを形成できるための援助が出来ることが求められよう。福祉専門職の育成にあたって、学生の子ども・子育てに対するイメージを把握することは、学生の理解や指導にも役立つものと思われる。

久留米大学では、2008(平成20)年9月20日に、比較文化研究所の主催により「健康・生きがいのあるまちづくりフェスター子ども・子育てフェア」^{*1}(以下、「ゆにばひろば」と記す)を開催し、文学部社会福祉学科からはボランティア・一般参加として多くの学生が参加した。このイベントは子ども・子育てに関わる久留米市内の行政・地域組織・ボランティア・NPOや産業界の団体との産学官民協働により開催され、親子連れや地元保育園児をはじめ多

くの来場者を得た。そこでは久留米市における子どもの姿、子ども・子育て支援の姿を見て取ることが出来たものとする。この「ゆにばひろば」に参加した学生の経験の、その後学生自身の子ども・子育てに対するイメージへの影響はどのようなものであったかという、「ゆにばひろば」の効果測定を行うことも本研究の目的のひとつである。

子ども・子育てに対するイメージについての研究はこれまで、「親(おや)性」「親性準備性」^{*2}に関する研究の一環として行われてきた。その測定尺度に用いられた質問項目について、伊藤(2003)が先行研究を整理したところによれば、①子どもに関するもの(イメージ・関心・感情)、②子育てに関するもの(感情・認識・発達・養育方法)、③親になることに関するもの(感情・意識)などが含まれている⁹⁾。特定の学習過程における意識の変化を取り扱った研究も見られるが、いずれも保育所と協働した保育体験学習のプログラムにおけるものであり⁵⁰⁾、「ゆにばひろば」のように産学官民協働によるイベントへの参加による意識の変化を捉えようとする研究は今のところ見られない。

以上のような問題意識から、本研究においては、福祉専門職となるべく学修を行う社会福祉学科の学生の子ども・子育てに対するイメージを把握し、今後の指導に関する資料を得るとともに、「ゆにばひろば」への参加への意識、あるいは学生自身が持つ子ども・子育てに関わる経験との関連を探ることをもって、良好な子ども・子育てイメージの形成と、その支援のあり方についての一提案としたい。

2. 対象と方法

1) 調査対象

本研究の対象者は、4年制大学の学生1年生から3年生の全302名であった。各学年の内訳は、1年生112名、2年生104名、3年生78名であった。また、男女の内訳は、男子学生125名(41.5%)、女子学生176名(58.5%)、無記入1名(0.3%)であった。

*1大学を開放し、そこが産学官民協働の場となることを願い、通称を「ゆにばひろば」とした。

*2用語はまだ統一したものではなく「親になることの準備状態」「親準備性」「ナーチュランス(養護性)」「育児性」などとする研究もある。

2) 調査時期

調査の実施日については、1年生は2008年10月27日、2年生は2008年10月30日、3年生は2008年10月28日であった。

3) 調査内容

本調査票は3部構成となっている。第1部は、性別、学年、子どもとの接触経験、「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加状況など基本属性と子どもの対する認識について尋ねる内容、第2部は、大学生の子ども観を尋ねる内容、第3部は、大学生の親になることへの意識を尋ねる内容であった。

本調査票では、先行研究から『子ども観』尺度と『親になることへの意識』尺度の2つの既存の尺度を用いている。以下に、この両尺度の詳細と特徴について説明する。

① 『子ども観』尺度について

大学生の子ども観を測定するものとして、『子ども観』尺度を用いた。この尺度はもともと、1981年に女性の生活史研究会が作成した子どもの価値観に関する質問紙23項目を参考に、本田が⁷⁾改正し29項目の質問紙として作成したものである。本研究では、この29項目のうち、ジェンダーバイアスを除いた25項目を質問項目として設定した。

以下に全25項目の質問内容を示す (Table 1)。

以下に全25項目の質問内容を示す (Table 1)。
 評価方法としては、25項目の質問項目のそれぞれについて4段階の評定（「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」）のうち、いずれか1つを選択させた。また、4段階の評定の配点は「とてもそう思う」を4点、「ややそう思う」を3点、「あまりそう思わない」を2点、「全くそう思わない」を1点とする順序的配点を行った。なお、25項目のうち1項目（問24 生活水準を落としてまで子どもを持つとは思わない）は逆転項目であり、配点が「とてもそう思う」を1点、「ややそう思う」を2点、「あまりそう思わない」を3点、「全くそう思わない」を4点となる。

Table 1 『子ども観』尺度の質問項目

問1	子供は天からの授かりものであると思う。
問2	自分が動けなくなったとき、わが子に面倒をみてもらいたいと思う。
問3	子どもがいると夫婦の間に問題をたくさん引き起こすと思う。
問4	夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然であると思う。
問5	子どもを産み育てるのは社会に対する義務だと思う。
問6	子どもの存在によって、家の中での自分の位置が定まるような気がする。
問7	子どもには親のかなえられなかったことをやらせたいと思う。
問8	親には親の世界が、子には子の世界があると思う。
問9	子どもがいると自分の自由な行動が制限されると思う。
問10	子どもが自分を必要だと感じてくれるだけでも生きている甲斐があると思う。
問11	子どもがほめられたとき、自分もほめられた気になると思う。
問12	人生で大事なことは子どもを育てて初めて経験できると思う。
問13	夫婦にとって子どもができることは自然であると思う。
問14	子どもの世話は精神的・肉体的に疲れると思う。
問15	子どもをつくることは、結婚の重要な意義の一つであると思う。
問16	子どもの成長こそ最大の喜びだと思う。
問17	子どもがいることで、夫婦の危機が救われることがあると思う。
問18	子どもを育てることは、自分の成長につながると思う。
問19	子どもがいれば、死後も自己の分身が生き続けていると感じると思う。
問20	子どもは夫婦の結びつきを一層強めると思う。
問21	子どもを残すことで、自分が生きた証拠を残せると思う。
問22	子どもがどのような道を選ぼうと、それを認めてやりたいと思う。
問23	子どもがいることは大きな生きがいであると思う。
問24	生活水準を落としてまで子どもを持つとは思わない。
問25	自分の子どもを持つてみたいと思う。

② 『親になることへの意識』尺度について

大学生の親になることへの意識を測定するものとして、中島ら⁸⁾の『親になることへの意識』尺度を用いた。この尺度は牧野ら⁹⁾が親になることへの準備状況を測定する尺度として開発したものを中島らが改編したものである。本尺度の特徴は、乳幼児に対する感情や認知、子育てに関する行動や感情、親になることに関する感情や認知について多角的に測定が可能なことである。また、先行の研究の結果から、本尺度の信頼性は高いこと（Cronbachの内的一貫信頼性係数： $\alpha=0.82$ ）が証明されている。

以下に全25項目の質問内容を示す（Table 2）。

評定方法としては、25項目の質問項目のそれぞれについて4段階の評定（「とてもそうである」「ややそうである」「あまりそうではない」「全くそうではない」）のうち、いずれか1つを選択させた。また、4段階の評定の配点は「とてもそうである」を4点、「ややそうである」を3点、「あまりそうそうではない」を2点、「全くそうではない」を1点とする順序的配点を行った。なお、25項目のうち6項目（問

2 赤ちゃんの泣き声が耳障り、問4 子どもがうるさくしているとイライラする、問6 小さな子どもの相手をするのはつまらない、問10 私は子どもを育てたくない、問11 赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う、問12 赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ）は逆転項目であり、配点が「とてもそうである」を1点、「ややそうである」を2点、「あまりそうではない」を3点、「全くそうではない」を4点となる。

4) 統計的解析法

『子ども観』尺度と『親になることへの意識』尺度について、質的内容を明らかにするために、主因子法（バリマックス回転）による因子抽出を行った。抽出された因子については、Cronbachの α 係数を求め各因子の内的一貫信頼性を算出した。また、抽出された因子と調査票の第1部で尋ねた項目との関連性を明らかにするために分散分析を行った。

なお、以上の解析では、Microsoft Excel 2007、統計ソフト Windows for SPSS 16.0Jを用いた。

Table 2 『親になることへの意識』尺度の質問項目

問1	赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる。
問2	赤ちゃんの泣き声は耳ざわりである。
問3	小さな子どもに興味がある。
問4	子どもがうるさくしているとイライラする。
問5	小さな子どもと遊ぶのが好きである。
問6	小さな子どもの相手をするのはつまらない。
問7	赤ちゃんを見ると抱きしめたくなくなる。
問8	赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい。
問9	私はよい親になれると思う。
問10	私は子どもを育てたくない。
問11	赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う。
問12	赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ。
問13	子どもをあつかう職業に就きたいと思う。
問14	新聞などで子育てに関する記事をよく読む。
問15	小さな子どもは親の言うことに従うべきである。
問16	子どもは人格をもった存在である。
問17	子どもは男女が協力して育てるものである。
問18	子育ては人と人の付き合いである。
問19	子育ては毎日毎日同じことの繰り返しである。
問20	子どもの成長の仕方を知ることが大切である。
問21	子どもを育てている間、親は自由な時間が減る。
問22	子どもを育てると親も成長する。
問23	父親よりも母親の方が子どもを育てるのにむいている。
問24	親は子育てを通して社会に目を向けるべきである。
問25	子育ては楽しいものである。

5) 倫理的配慮

調査対象者に対して、調査への協力依頼文の中で、この調査は大学生の子どもと子育てに関する認識を明らかにすることで、今後の子育て支援のあり方について役立てていくという主旨を伝え、無記名で回答を求めた。また、本調査はあくまでも任意であり成績や評価とは一切関係しないこと、調査への協力によって不利益を及ぼすものではないことを明記した。また、回答結果はコンピュータによって処理され、結果は学術的な目的以外では使用しないことについて説明をした。

3. 結果

1) 調査対象者の基本属性と子どもに対する認識

Table 3 に示すように、本研究の調査対象者は、1年生112名、2年生104名、3年生85名であった。また、全体の男女の内訳は、男子学生125名(41.5%)、女子学生176名(58.5%)であった。

Table 3 調査対象者の性別と学年

	1年生	2年生	3年生	全体
男子学生	48 15.9%	36 12.0%	41 13.6%	125 41.5%
女子学生	64 21.3%	68 22.6%	44 14.7%	176 58.5%
合計	112 37.2%	104 34.6%	85 28.3%	301 100.0%

平成20年度の「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」の参加形態については、「ボランティアとして参加した」が32名(17.2%)、「一般参加者として参加した」が202名(66.9%)、「参加していない」が48名(15.9%)であった(Table 4)。

Table 4 平成20年度の「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」の参加形態について

	度数	%
ボランティアとして参加した	32	17.2
一般参加者として参加した	202	66.9
参加していない	48	15.9

n=302

「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加後の子育てに対する関心度については、「とても高まった」と「やや高まった」の回答を合わせると約8割(81.4%)が「高まった」と回答していた(Table 5)。

Table 5 「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」の参加後の子育てに対する関心度について

	度数	%
とても高まった	55	21.3
やや高まった	155	60.1
あまり高まらなかった	40	15.5
まったく高まらなかった	8	3.1

n=258

「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加意欲については、「ぜひ参加したい」と「どちらかといえば参加したい」の回答を合わせると約7割(69.8%)で「参加したい」と回答していた(Table 6)。

Table 6 「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」の参加意欲について

	度数	%
ぜひ参加したい	65	21.5
どちらかといえば参加したい	146	48.3
どちらかといえば参加したくない	72	23.8
まったく参加したくない	19	6.3

n=302

子ども・子育てと地域との関係に関する質問については、『子どもは地域の宝であると思う』という質問では、「とてもそう思う」と「ややそう思う」の回答を合わせると約9割(88.0%)が「そう思う」と回答していた。また、『子育てには地域の協力が必要であると思う』という質問では、「とてもそう思う」と「ややそう思う」の回答を合わせると9割以上(94.7%)が「そう思う」と回答していた(Table 7)。

Table 7 子ども・子育てと地域との関係に関する質問の回答

	子どもは地域の宝であると思う		子育てには地域の協力がもっと必要であると思う	
	度数	%	度数	%
とてもそう思う	130	43.0	194	64.2
ややそう思う	136	45.0	92	30.5
あまりそう思わない	30	9.9	13	4.3
全くそう思わない	6	2.0	3	1.0

n=302

さらに、乳幼児との接触経験を尋ねる質問については、『小学校入学前の乳幼児と遊んだこと』については、「全くなかった」と「あまりなかった」を合わせると約8割(77.8%)が「なかった」と回答していた(Table 8)、『小学校入学前の乳幼児の世話をしたこと』については、「全くなかった」と「あまりなかった」を合わせると約6割(63.9%)が「なかった」と回答していた(Table 9)、『小学校入学前の乳幼児に何かを教えたこと』については、「全くなかった」と「あまりなかった」を合わせると約5割(53.5%)が「なかった」と回答していた(Table 10)、『小学校入学前の乳幼児をもつ親の話を聞いたこと』については、「全くなかった」と「あまりなかった」を合わせると約5割(52.5%)が「なかった」と回答していた(Table 11)。

Table 8 小学校入学前の乳幼児と遊んだ経験について

	度数	%
あった	20	6.6
ときどきあった	47	15.6
あまりなかった	74	24.5
全くなかった	161	53.3

n=302

Table 9 小学校入学前の乳幼児の世話をした経験について

	度数	%
あった	36	11.9
ときどきあった	73	24.2
あまりなかった	69	22.8
全くなかった	124	41.1

n=302

Table 10 小学校入学前の乳幼児に何かを教えた経験について

	度数	%
あった	49	16.3
ときどきあった	91	30.2
あまりなかった	70	23.3
全くなかった	91	30.2

Table 11 小学校入学前の乳幼児をもつ親の話を聞いた経験について

	度数	%
あった	52	17.3
ときどきあった	91	30.2
あまりなかった	80	26.6
全くなかった	78	25.9

n=301

2) 『子ども観』尺度と『親になることへの意識』尺度の基礎統計

『子ども観』尺度の25項目の平均値と標準偏差をTable 12に示す。平均値の高かった項目は、「問18 子どもを育てることは、自分の成長につながると思う」(平均値=3.65)、「問8 親には親の世界が、子には子の世界があると思う」(平均値=3.56)、「問25 自分の子どもを持ってみたいと思う」(平均値=3.56)などであった。一方、平均値の低かった項目は、「問7 子どもには親のかなえられなかったことをやらせたいと思う」(平均値=2.15)、「問3 子どもがいると夫婦の間に問題をたくさん引き起こすと思う」(平均値=2.30)、「問5 子どもを産み育てるのは社会に対する義務だと思う」(平均値=2.37)などであった。

つぎに、『親になることへの意識』尺度の25項目の平均値と標準偏差をTable 13に示す。平均値の高かった項目は、「問17 子どもは男女が協力して育てるものである」(平均値=3.77)、「問22 子どもを育てると親も成長する」(平均値=3.69)、「問20 子どもの成長の仕方を知ることは大切である」(平均値=3.63)などであった。

3) 『子ども観』尺度と『親になることへの意識』尺度の因子抽出の結果

大学生の子ども観について、主因子法(バリマッ

Table 12 『子ども観』尺度の記述統計量

質問内容	有効数	平均値	標準偏差
問1 子供は天からの授かりものであると思う。	302	3.06	0.90
問2 自分が働けなくなったとき、わが子に面倒をみてもらいたいと思う。	302	2.55	0.87
問3 子どもがいると夫婦の間に問題をたくさん引き起こすと思う。	302	2.30	0.74
問4 夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然であると思う。	301	3.29	0.80
問5 子どもを産み育てるのは社会に対する義務だと思う。	302	2.37	0.90
問6 子どもの存在によって、家の中の自分の位置が定まるような気がする。	302	2.55	0.81
問7 子どもには親のかなえられなかったことをやらせたいと思う。	300	2.15	0.95
問8 親には親の世界が、子には子の世界があると思う。	302	3.56	0.54
問9 子どもがいると自分の自由な行動が制限されると思う。	302	2.78	0.71
問10 子どもが自分を必要だと感じてくれるだけでも生きている甲斐があると思う。	302	3.49	0.69
問11 子どもがほめられたとき、自分もほめられた気になると思う。	302	3.29	0.74
問12 人生で大事なことは子どもを育てて初めて経験できると思う。	301	2.81	0.81
問13 夫婦にとって子どもができることは自然であると思う。	300	2.94	0.87
問14 子どもの世話は精神的・肉体的に疲れると思う。	302	2.98	0.70
問15 子どもをつくることは、結婚の重要な意義の一つであると思う。	302	2.60	0.84
問16 子どもの成長こそ最大の喜びだと思う。	300	3.30	0.79
問17 子どもがいることで、夫婦の危機が救われることがあると思う。	302	3.26	0.76
問18 子どもを育てることは、自分の成長につながると思う。	302	3.65	0.58
問19 子どもがいれば、死後も自己の分身が生き続けていると感じると思う。	301	2.40	0.97
問20 子どもは夫婦の結びつきを一層強めると思う。	302	3.39	0.69
問21 子どもを残すことで、自分が生きた証拠を残せると思う。	302	2.67	0.91
問22 子どもがどのような道を選ぼうと、それを認めてやりたいと思う。	302	3.45	0.63
問23 子どもがいることは大きな生きがいであると思う。	302	3.55	0.66
問24 生活水準を落としてまで子どもを持つとは思わない。(逆転項目)	301	2.29	0.80
問25 自分の子どもを持つてみたいと思う。	302	3.56	0.74

Table 13 『親になることへの意識』尺度の記述統計量

質問内容	有効数	平均値	標準偏差
問1 赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる。	302	3.51	0.72
問2 赤ちゃんの泣き声は耳ざわりである。(逆転項目)	302	2.21	0.79
問3 小さな子どもに興味がある。	302	3.31	0.84
問4 子どもがうるさくしているとイライラする。(逆転項目)	302	2.23	0.80
問5 小さな子どもと遊ぶのが好きである。	302	3.33	0.79
問6 小さな子どもの相手をするのはつまらない。(逆転項目)	302	1.69	0.71
問7 赤ちゃんを見ると抱きしめたい。	302	3.20	0.88
問8 赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい。	301	3.16	0.85
問9 私はよい親になれると思う。	302	2.46	0.80
問10 私は子どもを育てたくない。(逆転項目)	301	1.59	0.79
問11 赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う。(逆転項目)	302	1.60	0.68
問12 赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ。(逆転項目)	302	1.92	0.82
問13 子どもをあつかう職業に就きたいと思う。	302	2.54	0.99
問14 新聞などで子育てに関する記事をよく読む。	302	2.24	0.88
問15 小さな子どもは親の言うことに従うべきである。	302	2.44	0.73
問16 子どもは人格をもった存在である。	300	3.72	0.49
問17 子どもは男女が協力して育てるものである。	300	3.77	0.47
問18 子育ては人と人の付き合いである。	300	3.53	0.65
問19 子育ては毎日毎日同じことの繰り返しである。	300	2.11	0.76
問20 子どもの成長の仕方を知ることが大切である。	300	3.63	0.52
問21 子どもを育てている間、親は自由な時間が減る。	300	2.98	0.63
問22 子どもを育てると親も成長する。	300	3.69	0.54
問23 父親よりも母親の方が子どもを育てるのにむいている。(逆転項目)	300	2.62	0.77
問24 親は子育てを通して社会に目を向けるべきである。	300	3.33	0.60
問25 子育ては楽しいものである。	300	3.45	0.64

Table 14 『子ども観』尺度の因子抽出結果 (主因子法・バリマックス回転)

	因子			
	1	2	3	4
問23 子どもがいることは大きな生きがいであると思う。	0.738	0.123	-0.091	0.128
問18 子どもを育てることは、自分の成長につながると思う。	0.737	0.138	-0.022	0.119
問16 子どもの成長こそ最大の喜びだと思う。	0.597	0.297	-0.240	0.181
問10 子どもが自分を必要だと感じてくれるだけでも生きている甲斐があると思う。	0.595	0.252	-0.109	0.031
問20 子どもは夫婦の結びつきを一層強めると思う。	0.589	0.257	-0.114	0.304
問25 自分の子どもを持ってみたいと思う。	0.560	0.271	-0.256	0.150
問17 子どもがいることで、夫婦の危機が救われることがあると思う。	0.429	0.033	-0.045	0.352
問24 生活水準を落としてまで子どもを持とうとは思わない。	-0.413	0.015	0.352	0.020
問13 夫婦にとって子どもができることは自然であると思う。	0.144	0.592	-0.075	-0.028
問15 子どもをつくることは、結婚の重要な意義の一つであると思う。	0.115	0.552	0.056	0.189
問4 夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然であると思う。	0.372	0.532	-0.159	0.058
問5 子どもを産み育てるのは社会に対する義務だと思う。	0.073	0.472	0.099	0.229
問12 人生で大事なことは子どもを育てて初めて経験できると思う。	0.327	0.427	-0.140	0.191
問6 子どもの存在によって、家の中での自分の位置が定まるような気がする。	0.073	0.387	0.047	0.177
問14 子どもの世話は精神的・肉体的に疲れると思う。	-0.037	-0.080	0.680	0.004
問9 子どもがいると自分の自由な行動が制限されると思う。	-0.113	-0.014	0.576	-0.012
問3 子どもがいると夫婦の間に問題をたくさん引き起こすと思う。	-0.179	0.092	0.572	0.027
問21 子どもを残すことで、自分が生きた証拠を残せると思う。	0.190	0.330	-0.003	0.723
問19 子どもがいれば、死後も自己の分身が生き続けていると感じると思う。	0.205	0.273	0.048	0.654

クス回転)に因子抽出を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性から4因子解を適当と判断し採用した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合一貫性の係数(α 係数)を求めたところ、高い信頼性が確認された。

各因子の内訳は、第1因子8項目、第2因子6項目、第3因子3項目、第4因子2項目である。各因子の具体的な内容についてはTable 14に示す。第1因子は、因子負荷量の高い順に「問23 子どもがいることは大きな生きがいであると思う」、「問18 子どもを育てることは、自分の成長につながると思う」、「問16 子どもの成長こそ最大の喜びだと思う」などで、これを『自己成長としての存在』と命名した。第2因子は、因子負荷量の高い順に「問13 夫婦にとって子どもができることは自然であると思う」、「問15 子どもをつくることは、結婚の重要な意義の一つであると思う」、「問4 夫婦が子どもを欲しいと思うのは当然であると思う」などで、これを『自然的存在』と命名した。第3因子は、因子負荷

量の高い順に「問14 子どもの世話は精神的・肉体的に疲れると思う」、「問9 子どもがいると自分の自由な行動が制限されると思う」、「問3 子どもがいると夫婦の間に問題をたくさん引き起こすと思う」などで、これを『制限としての存在』と命名した。第4因子は、因子負荷量の高い順に「問21 子どもを残すことで、自分が生きた証拠を残せると思う」、「問19 子どもがいれば、死後も自己の分身が生き続けていると感じると思う」で、これを『分身としての存在』と命名した。

つぎに、大学生の親になることへの意識について、主因子法(バリマックス回転)に因子抽出を行った。その結果、スクリー基準に基づく固有値の変化および解釈可能性から5因子解を適当と判断し採用した。また、採用された各因子の信頼性を確認するために、クロンバックの内的整合一貫性の係数(α 係数)を求めたところ、高い信頼性が確認された。

各因子の内訳は、第1因子7項目、第2因子6項目、第3因子4項目、第4因子4項目、第5因子4項目である。各因子の具体的な内容については

Table 15 『親になることへの意識』尺度の因子抽出結果（主因子法・バリマックス回転）

	因子				
	1	2	3	4	5
問5 小さな子どもと遊ぶのが好きである。	0.749	0.236	0.301	-0.271	-0.055
問13 子どもをあつかう職業に就きたいと思う。	0.705	0.080	0.173	-0.110	-0.071
問3 小さな子どもに興味がある。	0.700	0.184	0.431	-0.163	-0.008
問8 赤ちゃんの子守りをするのはおもしろい。	0.681	0.206	0.310	-0.305	-0.048
問7 赤ちゃんを見るのと抱きしめたくなる。	0.568	0.323	0.411	-0.177	-0.004
問1 赤ちゃんを見ているだけで楽しくなる。	0.497	0.325	0.303	-0.304	0.056
問14 新聞などで子育てに関する記事をよく読む。	0.438	0.056	-0.100	0.011	-0.030
問22 子どもを育てると親も成長する。	0.169	0.703	0.228	-0.090	-0.059
問16 子どもは人格をもった存在である。	0.055	0.603	-0.030	-0.104	-0.111
問20 子どもの成長の仕方を知ることは大切である。	0.036	0.571	0.249	-0.093	-0.019
問17 子どもは男女が協力して育てるものである。	0.178	0.567	0.070	-0.076	-0.139
問18 子育ては人と人の付き合いである。	0.096	0.513	-0.024	-0.003	-0.028
問24 親は子育てを通して社会に目を向けるべきである。	0.145	0.436	0.086	-0.112	0.177
問10 私は子どもを育てたくない。	-0.162	-0.267	-0.715	0.291	0.156
問25 子育ては楽しいものである。	0.447	0.359	0.491	-0.202	-0.019
問11 赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う。	-0.265	-0.356	-0.488	0.351	0.275
問9 私はよい親になれると思う。	0.332	-0.012	0.439	-0.042	0.065
問2 赤ちゃんの泣き声は耳ざわりである。	-0.142	-0.108	-0.222	0.811	0.093
問4 子どもがうるさくしているとイライラする。	-0.197	-0.113	-0.103	0.671	0.147
問6 小さな子どもの相手をするのはつまらない。	-0.379	-0.209	-0.308	0.443	0.256
問12 赤ちゃんのおむつを替えるのは嫌だ。	-0.287	-0.335	-0.255	0.348	0.230
問23 父親よりも母親の方が子どもを育てるのにむいている。	0.078	-0.005	-0.037	-0.066	0.491
問15 小さな子どもは親の言うことに従うべきである。	-0.098	-0.082	0.058	0.214	0.457
問21 子どもを育てている間、親は自由な時間が減る。	-0.161	0.142	-0.308	0.172	0.438
問19 子育ては毎日毎日同じことの繰り返しである。	-0.027	-0.189	-0.011	0.207	0.331

Table 15に示す。第1因子は、因子負荷量の高い順に「問5 小さな子どもと遊ぶのが好きである」、「問13 子どもをあつかう職業に就きたいと思う」、「問3 小さな子どもに興味がある」などで、これを『子ども好き』と命名した。第2因子は、因子負荷量の高い順に「問22 子どもを育てると親も成長する」、「問16 子どもは人格をもった存在である」、「問20 子どもの成長の仕方を知ることは大切である」などで、これを『子育てを通しての社会性の発達』と命名した。第3因子は、因子負荷量の高い順に「問10 私は子どもを育てたくない」、「問25 子育ては楽しいものである」、「問11 赤ちゃんの世話をするのはつまらないと思う」などで、これを『無関心』と命名した。第4因子は、因子負荷量の高い順に「問2 赤ちゃんの泣き声は耳ざわりである」、

「問4 子どもがうるさくしているとイライラする」、「問6 小さな子どもの相手をするのはつまらない」などで、これを『拒否』と命名した。第5因子は、因子負荷量の高い順に「問23 父親よりも母親の方が子どもを育てるのにむいている」、「問15 小さな子どもは親の言うことに従うべきである」、「問21 子どもを育てている間、親は自由な時間が減る」などで、これを『制限』と命名した。

4) 『子ども観』尺度と『親になることへの意識』尺度の因子に関連する項目の分析結果

まず、調査票の第1部の子どもとの接触経験、「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加状況など基本属性と子どもの対する認識について尋ねた項目と『子ども観』の4因

子との関連性については、その一覧を Table 16 に示す。

特出すべき点としては、まず、「自己成長としての存在」はすべての質問項目と有意な関係にあることが示されており、その他の「自然的存在」、「制限としての存在」、「分身としての存在」ともに、接触経験や子どもの対する認識と多くの点で関係性をもつ

ていることが明らかとなった。特に、接触経験については、経験なし群で「自己成長としての存在」、「自然的存在」、「分身としての存在」といった肯定的内容の認識が強い傾向にある一方、経験あり群では、「制限としての存在」という否定的内容の認識が強い傾向にあることが示された。

同様に、調査票の第1部の子どもとの接触経験、

Table 16 大学生の子ども親に関係する項目の分散分析結果

	群分け	自己成長としての存在			自然的存在			制限としての存在			分身としての存在		
		平均	標準偏差	t 値	平均	標準偏差	t 値	平均	標準偏差	t 値	平均	標準偏差	t 値
子育てへの関心度	高位群	27.03	2.69	4.2**	16.70	3.11	1.57	7.95	1.63	2.18*	5.23	1.62	1.43
	低位群	16.70	4.63		15.88	3.99		8.52	1.70		4.85	1.68	
「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加意欲	高位群	26.88	2.90	3.08**	16.78	3.15	1.59	7.95	1.54	1.63	5.24	1.64	2.83**
	低位群	25.62	4.04		16.12	3.48		8.29	1.84		4.64	1.73	
子どもは地域の宝だ	「そう思う」と回答群	23.97	4.46	5.04**	15.28	3.36	2.58**	8.81	1.89	2.97**	4.36	1.62	2.68**
	「そう思わない」と回答群	26.84	2.99		16.76	3.20		7.95	1.57		5.16	1.67	
子育てには地域の協力が必要だ	「そう思う」と回答群	22.37	5.35	5.32**	14.18	3.90	3.06**	9.00	1.67	2.39*	4.18	1.60	2.14*
	「そう思わない」と回答群	26.73	3.03		16.71	3.17		8.00	1.62		5.10	1.68	
乳幼児と遊んだ経験の有無	経験あり群	25.17	3.7	3.76**	15.8	3.2	2.22*	8.61	1.52	3.21**	4.65	1.83	2.24*
	経験なし群	26.87	3.12		16.8	3.24		7.89	1.63		5.17	1.62	
乳幼児の世話をした経験の有無	経験あり群	25.46	3.68	4.16**	15.92	3.12	2.63**	8.44	1.52	3.13**	4.75	1.78	2.41*
	経験なし群	27.08	2.96		16.94	3.27		7.83	1.66		5.23	1.60	
乳幼児に何か教えた経験の有無	経験あり群	25.63	3.65	4.37**	16.00	2.94	2.95**	8.22	1.68	1.77	4.67	1.65	3.71**
	経験なし群	27.27	2.81		17.01	3.43		7.89	1.59		5.38	1.64	
乳幼児をもつ親の話を聞いた経験の有無	経験あり群	25.89	3.41	3.11**	16.03	3.03	2.84**	8.03	1.55	0.12	4.80	1.62	2.64**
	経験なし群	27.07	3.17		17.09	3.37		8.06	1.71		5.31	1.70	

Table 17 大学生の親になることへの意識に関係する項目の分散分析結果

	群分け	子ども好き		子育てによる社会的発達		無関心		拒否		制限						
		平均	標準偏差	t 値	平均	標準偏差	t 値	平均	標準偏差	t 値	平均	標準偏差	t 値			
子育てへの関心度	高位群	21.99	4.11	3.25**	21.95	2.04	3.18**	9.12	1.14	0.56	7.87	2.35	2.12*	10.23	2.18	0.46
	低位群	19.72	5.22		20.85	2.55		9.02	1.21		8.68	2.68		10.39	1.92	
「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加意欲	高位群	22.01	4.00	4.59**	21.91	2.06	3.01**	9.07	1.18	0.68	7.81	2.20	2.29*	10.32	2.50	0.61
	低位群	19.48	5.21		21.09	2.33		9.17	1.19		8.49	2.70		10.14	1.96	
子どもは地域の宝だ	「そう思う」と回答群	17.58	5.50	5.39**	19.91	2.75	5.27**	9.30	1.48	1.09	9.13	3.09	3.05**	10.83	3.79	1.54
	「そう思わない」と回答群	21.75	4.17		21.89	1.98		9.07	1.14		7.86	2.23		10.19	2.08	
子育てには地域の協力が必要だ	「そう思う」と回答群	17.12	6.03	3.81**	19.31	2.89	4.58**	8.86	1.12	0.79	9.50	3.55	2.58**	11.00	2.16	1.28
	「そう思わない」と回答群	21.48	4.35		21.79	2.06		9.11	1.19		7.93	2.27		10.22	2.35	
乳幼児と遊んだ経験の有無	経験あり群	18.18	5.10	6.72**	21.06	2.46	2.58**	9.31	1.42	1.65	9.43	2.74	5.79**	10.95	2.84	2.74**
	経験なし群	22.13	3.97		21.83	2.06		9.04	1.10		7.61	2.10		10.07	2.15	
乳幼児の世話をした経験の有無	経験あり群	18.90	4.90	7.27**	21.29	2.32	2.21*	9.21	1.27	1.19	9.00	2.57	5.65**	10.72	2.39	2.56*
	経験なし群	22.57	3.74		21.87	2.07		9.04	1.13		7.46	2.07		10.01	2.29	
乳幼児に何か教えた経験の有無	経験あり群	19.72	5.00	5.80**	21.15	2.27	3.95**	9.18	1.24	1.17	8.66	2.51	4.60*	10.47	2.33	1.39
	経験なし群	22.62	3.59		22.13	1.98		9.02	1.13		7.43	2.10		10.10	2.36	
乳幼児をもつ親の話を聞いた経験の有無	経験あり群	20.27	4.77	3.72**	21.23	2.27	3.34**	9.16	1.28	0.89	8.51	2.43	3.70**	10.39	2.30	0.90
	経験なし群	22.19	4.10		22.06	2.02		9.04	1.09		7.52	2.19		10.14	2.39	

「健康生きがいのあるまちづくりフェスタ（ゆにばひろば）」への参加状況など基本属性と子どもの対する認識について尋ねた項目と『親になることへの意識』の5因子との関連性については、その一覧をTable 17に示す。

特出すべき点としては、「子ども好き」、「子育てによる社会性の発達」、「拒否」といった因子は、すべての質問項目と有意な関係にあることが示された。特に、接触経験については、経験なし群で「子ども好き」、「子育てによる社会性の発達」といった肯定的内容の認識が高い傾向にある一方、経験あり群では、「拒否」という否定的内容の認識が強い傾向にあることが示された。

4. 分析と考察

「ゆにばひろば」参加による子育てへの関心度の変化は、『子ども観』の「自己成長としての存在」「制限としての存在」の2因子との相関が見られた。「自己成長としての存在」因子においては「高位群」の方が高く、「高位群」がより子ども・子育てに対して「自己成長としての存在」としてポジティブに捉えていることがわかる。「制限としての存在」因子においては「低位群」の方が高く、「低位群」がより子どもを「制限としての存在」としてネガティブに捉えていることがわかる。一方、『親になることへの意識』においては、「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」「拒否」の3因子との相関が見られた。このうち「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」の2因子においては「高位群」の方が高く、「高位群」の方が子ども・子育てによる成長についてポジティブに捉えていることがわかる。「拒否」因子については「低位群」の方が高く、「低位群」の方が子どもに対するネガティブな感情が強い様子がわかる。

「ゆにばひろば」への今後の参加意欲は、『子ども観』の「自己成長としての存在」「分身としての存在」の2因子との相関が見られた。いずれも「高位群」の方が高く、「高位群」では子ども・子育てに対してポジティブに捉えていることがわかる。一方、『親になることへの意識』においては、「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」「拒否」の3因

子との相関が見られた。このうち「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」の2因子においては「高位群」の方が高く、「高位群」の方が子ども・子育てによる成長についてポジティブに捉えていることがわかる。「拒否」因子については「低位群」の方が高く、「低位群」の方が子どもに対するネガティブな感情が強い様子がわかる。

以上、「ゆにばひろば」による子育てへの関心の高まりや、今後の参加意欲の高まりは、子ども・子育てに対するポジティブな感情を高め、反対にネガティブな感情を抑えることにつながるものと思われる。「ゆにばひろば」により子育てへの関心が高まった「高位群」は210名（81.4%、 $n=258$ ）、「ゆにばひろば」へ今後も参加したいとする「高位群」も211名（69.9%、 $n=302$ ）であることをあわせて考えるならば、「ゆにばひろば」への学生の参加は、良好な子ども・子育てイメージの形成に対して、有意義であったと評価することが出来る。

今回、このような効果を得ることが出来た理由として「ゆにばひろば」が、学生にとって「親子」の姿を見ることが出来、またふれ合う機会であったことが考えられよう。先行の取り組みにおいては多くが保育所等との連携によるものであり、「子どものみ」あるいは「子どもと保育者」の姿を見る機会にとどまっていた。親子連れでの来場者の姿を見ることで、親の子どもへのかかわりの姿を見る機会となった。少子化・都市化の影響でこれまで子ども・子育て、そして親となることに対する具体的なモデルが自分の親以外には身近に存在しなかった学生が増えている中、ここで見た親子の姿は学生にとって子ども・子育てに対する良好なイメージを形成するためのモデルとなったのではないだろうか。

子ども・子育てと地域との関係についての意識のうち、「子どもは地域の宝だ」とする意識は、『子ども観』の4因子すべてにおいて相関が見られた。このうち「自己成長としての存在」「自然的存在」「分身としての存在」の3因子においては「そう思う」群の方が高い。「制限としての存在」因子においては「そう思わない」群の方が高い。子どもに対する「地域の宝」としての意識と、子ども・子育てに対するポジティブな感情には関連があることがわかる。一方、『親になることへの意識』においては、「子ど

も好き」「子育てによる社会性の発達」「拒否」の3因子において相関が見られた。このうち「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」の2因子においては「そう思う」群の方が高い。「拒否」因子においては「そう思わない」群の方が高い。子どもに対する「地域の宝」としての意識と子ども・子育てによる成長についての捉え方、子どもに対するネガティブな感情についても関連があることがわかる。

また、「子育てには地域の協力が必要だ」とする意識もまた『子ども観』の4因子すべてにおいて相関が見られた。このうち「自己成長としての存在」「自然的存在」「分身としての存在」の3因子においては「そう思う」群の方が高い。「制限としての存在」因子においては「そう思わない」群の方が高い。子育てに対する「地域の協力」の意識と、子ども・子育てに対するポジティブな感情には関連があることがわかる。一方、『親になることへの意識』においては、「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」「拒否」の3因子において相関が見られた。このうち「子ども好き」「子育てによる社会性の発達」の2因子においては「そう思う」群の方が高い。「拒否」因子においては「そう思わない」群の方が高い。子育てに対する「地域の協力」の意識と、子ども・子育てによる成長についての捉え方、子どもに対するネガティブな感情についても関連があることがわかる。

今回、「子どもは地域の宝だ」とする意識において「そう思う」群は、266名(88.1%, n=302)「子育てには地域の協力が必要だ」とする意識において「そう思う」群は286名(94.7%, n=302)であった。これが「ゆにばひろば」の効果であったかどうかの判断は難しいが、少なくとも意識のレベルにおいては学生の多くは子ども・子育てを単に家庭だけのプライベートな営みとしてではなく、地域という社会的な営みとして考えており、それが子ども・子育てに対するポジティブなイメージに繋がっているものと考えられる。「ゆにばひろば」は大学だけでなく、行政、産業界、ボランティアやNPOの産学官民協働で開催されており、多くの地域組織やボランティアの参加を得た。いわば、子育てを支援する地域の資源、その縮図がそこにあったということである。都市化の中で、学生たちが「地域の連帯」

を実感することが出来る機会は限られてきており、「地域の連帯」の姿をそこに見ることが出来たということは、「ゆにばひろば」における大きな意義として評価することが出来る。

本研究から、大学生の子ども観ならびに親になることへの意識については、乳幼児との接触経験がおおいに関係していることが示された。特に、乳幼児との接触経験が乏しい群は、子ども観の「自己成長としての存在」、「自然的存在」、「分身としての存在」といった因子で、また親になることへの意識の「子ども好き」、「子育てによる社会性の発達」といった因子で意識が有意に高いことが分かった。つまり接触経験が乏しい学生で、乳幼児に対して肯定的内容の認識を抱いていることが明らかとなった。一方、接触経験がある群は、子ども観の「制限としての存在」や親になることへの意識の「拒否」といった因子で意識が有意に高いことが分かった。つまり接触経験がある学生は、乳幼児に対して否定的内容の認識を抱いていることが明らかになった。

佐藤¹⁰⁾は、中学生の乳幼児とのふれあい体験学習において、体験学習の後に乳幼児のイメージが具体的となり、親としての育児責任を認識するようになり、さらに、ふれあい体験以前にすでに乳幼児と接触経験がある群と、その経験が乏しい群では変化が異なり、乏しい群では、乳幼児イメージが具体的となり、経験がある群では、親の養育責任を強くいしきするようになるとの報告している。このように、本結果においても、経験がある群で否定的内容の認識を抱いている理由として、実際に乳幼児と遊んだり、物事を教えたりする経験を通じて、現実的な大変さや責任感の大きさを感じているためであると推測することができる。

また、實崎ら¹¹⁾の看護学生の母性看護実習経験と対児感情の関係性を調査によれば、意識的、能動的に乳幼児や親と関わる経験が学生の親性理念に影響を与えると指摘していることから、今回の「生きがいのあるまちづくりフェスタ(ゆにばひろば)」への参加によって、乳幼児に対してこれまで抱いていた感覚的なイメージが具体的なイメージへと変化していることも推測され、これは、学生がこれから親になる準備(レディネス)をしていく上での学習経験になったと考えられる。

さらに、本研究では検討することはできなかったが、諸井¹⁰⁾の研究では、現在と過去での接触経験による子ども観の相違を報告している。つまり、現在の接触経験と過去の接触経験ではその内容自体も異なり、また認識の仕方も異なることが予測される。今後は、現在と過去での接触経験の違いやその特徴も考慮した上で、大学生の子ども観や親になることへの意識について検討する必要があり課題として残された。

謝辞

アンケート調査の実施・集計に当たっては、久留米大学大学院比較文化研究科院生の藤島法仁氏、ポドリヤク・ナタリヤ氏、許莉芬氏、同医学系研究科の岡田栄作氏の協力得た。

最後に、本アンケート調査にご協力いただいた学生の皆様には感謝申し上げます。

本研究は、平成20年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業（継続分）により行われたものの一歩である。

【文献】

- 1) 金子 勇：都市の少子社会，東京大学出版会，東京（2003）
- 2) 厚生省：厚生白書，ぎょうせい，東京（1998）
- 3) 金子 勇：前掲書，（2003）
- 4) 伊藤葉子：中・高校生の親性準備性の発達．日本家政学会誌，54：801-812（2003）
- 5) 伊藤葉子：中・高校生の保育体験学習の教育的効果．乳幼児教育学研究，13：1-12（2004）
- 6) 藤後悦子：子どもへのナーチュランス（養護性）を育む発達教育プログラムが中学生の学校生活，地域関係に与える効果．保育学研究，45（2）：122-132（2007）
- 7) 本田時雄：大学生とその父母の子ども観および父親・母親イメージの時代推移．文教大学人間科学部「人間科学研究」，26：87-99（2004）
- 8) 中嶋律子ら：高校生・大学生の親になることへの意識調査．名古屋市立大学看護学部紀要，1：93-99（2001）
- 9) 牧野カツコ・中西雪夫：高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育．日本家庭科教育学会誌，32（2）：51-53（1989）
- 10) 佐藤洋美：乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響．日本生活体験学習学会誌，第4号：35-54（2004）．
- 11) 實崎美奈・阿南あゆみ・福澤雪子・河内しのぶ・金山正子：看護学生の対児感情と母性理念に影響を与える要因．産業医科大学雑誌，28（3）：294-304（2006）．
- 12) 諸井克英：女子青年における父親の魅力～父親との接触経験の影響～．同志社女子大学総合文化研究所紀要，第23巻：71-80（2006）．